ルツ記の研究 ── 1 章 8 ～ 17 節 ──

柊　　曉　生

はじめに

別稿において我々はルツ記 1 章 1-7 節の考察を試みた[1]。ルツ記 1 章の三部構成の最初の部分（A）である 1-7 節は,（a）1-2 節,（b）3-5 節,（c）6-7 節の三区分から成り立つと分析した。次稿ではこれに対応するルツ記 1 章の三部構成の最後の部分（A'）である 18-22 節の考察を試みる。この箇所もやはり（c'）18-19 節,（b'）20-21 節,（a'）22 節の三区分から成り立つもので，1 章は（A）a-b-c- と（A'）c'-b'-a'のキアスムスの形式で枠組が構成されている。

本稿はルツ記 1 章の三部構成の中心部分（B）である 8-17 節の考察を試みるものである。当該箇所を一瞥して明白なのは，ナオミの会話が三回あってそれが全体の骨組を構築しているということである。真中にあたる第 2 回目の会話は三部分に分割され，さらにその真中にあたる第 2 部分は三区分される。これは入れ子構造の文学様式で，中心は三区分の真中の第 2 区分（12 節後半）である。

ルツ記 1 章の集中化構造の真中にあたる（B）8-17 節は，巧妙な文学的技法を駆使してナオミと嫁たちとの会話が精彩に叙述されている箇所である[2]。

---

[1] 『アカデミア』文学･語学編第 89 号（南山大学，2011 年 1 月），55-96 頁。但し，57 頁の 1 章の構成の研究一覧に，1962 年，W. Rudolph, 1：1-7a, 7b-19a, 19b-22. 1969 年，E. Würthwein, 1：1-7a, 7b-19a, 19b-22a, 1：22b-2：23. を付加。74 頁の「ベト・レヘム往還」は「モアブ往還」に訂正。また 78 頁の注（36）の「人物」の問題に関しては別にあらためて考察する。

[2] ルツ記の 85 節中 55 節が会話である。P. Joüon, *Ruth*（Rome 1953）12 頁注（1）参照。

1 章 8–17 節の全体的構造[3]

1：8–9a　ナオミの会話（1）
1：9b　ナオミと嫁たち（1）
1：10　嫁たちの会話（1）
1：11–13　ナオミの会話（2）
1：14　嫁たちとナオミ（2）
1：15　ナオミの会話（3）
1：16–17　嫁ルツの会話（2）

1. ナオミの会話（第 1 回）

(1) 1：8–9a の本文

8aα（4 語）　ותאמר נעמי לשתי כלתיה
8aβ（5 語）　לכנה שבנה אשה לבית אמה
8bα（4 語）　יעשה יהוה עמכם חסד
8bβ（5 語）　כאשר עשיתם עם־המתים ועמדי
9aα（3 語）　יתן יהוה לכם
9aβ（5 語）　ומצאן מנוחה אשה בית אישה

(2) 1：8–9a の翻訳

8aα　ナオミは二人の嫁に言った。
8aβ　それぞれ母の家に帰って行きなさい。
8bα　主があなたがたを慈しまれますように，
8bβ　あなたがたが亡くなった者たちと私にしてくれたように，
9aα　主があなたがたに与えられますように，

---

[3] F. Bush の構造分析は筆者とは少しく異なり，7 節から 19 節前半までが集中化構造で形成されているとする。*Ruth/Esther*（WBC 9; Nashville et al. 1996）71–72 頁参照。I. Fischer は 6–10，11–14，15–19a に区分して考察しているが，以下に考察するようにこれは妥当とは思われない。*Rut*（HTh KAT; Freiburg et al. 2001）130–149 頁参照。

9aβ　安らぎ［の場所］を見つけなさい。それぞれ夫の家で。[4]

(3) 1：8-9a の構造

8aα　会話の導入句

A　8aβ　行く(imp.)＋帰る(imp.)＋それぞれ＋家に＋母の

B　8bα　する(3sg.m.)＋主＋～ともに(ʿim)・2pl.m ＋慈しみ

C　8bβ　כאשר ＋する(2pl.m.)　＋～ともに(ʿim)＋死者

＋～ともに(ʿimdi)・1sg.

B'　9aα　与える(3sg.m.)＋主＋～に(lᵉ)・2pl.m

A'　9aβ　見つける(imp.)＋安らぎ＋それぞれ＋家＋夫の

①枠組　A-A'

A　8aβ＝命令形＋命令形＋それぞれ＋家に＋母の

לכנה שבנה אשה לבית אמה

ומצאן מנוחה אשה בית אישה

A'　9aβ＝命令形＋名詞　＋それぞれ＋家　＋夫の

A と A' はナオミの会話の枠組を構成している。A では命令形が二回続けられているのに対し，A' では命令形が一回という違いはあるが，その後に続く「それぞれ母の家に」と「それぞれ夫の家（で）」によって対応関係があるのは明白である。ただ後者の「それぞれ夫の家（で）」には前置詞（ב/bᵉ）が欠けている[5]。これは 1：1 の「モアブの平野に」では前置詞「～において」（bᵉ）があるのに対し，1：2 の「モアブの平野（に）」では前置詞「～において」（bᵉ）がないのに呼応すると考えら

---

[4] 「夫の家を」と訳すことも可能である。月本昭男，「ルツ記」，『ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』（岩波書店 1998）4 頁参照。

[5] 通常は「～において」（ב/bᵉ）があってし然るべきところであるが，往々にして省略されることがある。仏語の chez（～のところで）がラテン語の casa（家）に由来するようなものであると P. Joüon は説明する。*Grammaire de l'hébreu biblique*（Rome 1923）§133c 参照。LXX は “ἐν οἴκῳ ἀνδρὸς αὐτῆς” と前置詞「～において」（ἐν）を補足する。

れる。ここでは母の家と夫の家が一対になっており[6]，一般に言われる父の家は言われていない[7]。

1–7 節では「ベト・レヘム」（食物の家）が出発地であり，帰還地であったが，8–17 節では「母の家」が帰還する場所であり，「夫の家」が嫁ぎ先，安らぎを見い出す場所として言われている[8]。この「安らぎ［の場所］」（מנוחה）は語形は少しく異なるが，3:1 でナオミの口から述べられる「安らぎ［の場所］」（מנוח）につながるものである。

8–17 節でナオミが語りかける相手は「二人の嫁」であるが，これは 1–7 の「二人の嫁」を受け継いでいる。また，ナオミが 8 節で最初に言う「行きなさい，帰りなさい」という命令形の動詞は，7 節での「行く」と「帰る」の動詞と同じ順序で述べられている。

1：7　אל־ארץ יהודה　　ושתי כלתיה עמה ותלכנה בדלך לשוב
1：8　שבנה אשה לבית אמה　　לכנה　　לשתי כלתיה

1：7　行く（3pl.f.）＋帰る（inf.）＋～へ（’el）→ユダの地へ
1：8　行く（imp.）＋帰る（imp.）→～に（l^{e}）→母の家に

②中心　B–C–B’

この箇所はナオミの第 1 回目の会話の中心部分であり，それゆえここにはナオミの重要な言葉が記されている。B–C–B’ の三分節は集中化構造でありながらも，B–C–B’ は微妙に連鎖している。

（ｉ）B–B’

B–C–B’ の集中化構造は，B–B’ それぞれの動詞と名詞「主」によって枠づけられている。ただ，前置詞は B が「～ともに」（‘im）であるの

---

[6]　「母の家」は創 24：28，雅 3：4，8：2 に出て来る（フランシスコ会聖書研究所訳注『士師記・ルツ記』（中央出版社 1993）159 頁，注 12 の引用例には創 24：28 が欠落）。ルツの父母はまだ健在であると考えられる（ルツ 2：11）。

[7]　アレクサンドリア版は「母の家」を「父の（πατρός）家」とする。「父の家」は創 38：11，レビ 22：13，民 30：17，申 22：21，士 19：2，3 の 6 箇所に見出される。

[8]　ルツ 1：9 では「安らぎを見つける」と言われるのに対して，エレ 45：3 では「安らぎを見つけない」と述べられている。

に対し，B' は「～に」(lᵉ) である。

B 8bα する (3sg.m) + 主 + ～ともに (ʿim) ・ 2pl.m[9]
B' 9aα 与える (3sg.m) + 主 ～に (lᵉ) ・ 2pl.m

B' には「主があなたがたに与えられますように」に続いて[10],「あなたがたは安らぎを見つけなさい」(ומצאן) とあるが[11], P. Joüon はこの ומצאן の接続詞 waw を前置詞「～に」(ל/lᵉ) の意味と解釈し，目的節 (למצאן) として理解すべきとする[12]。B と B' の対応関係から考えれば，「安らぎ」は先の「慈しみ」に関係しているとも考えられ[13]，また後の「夫の家」に連係しているとも思われる。

(ii) B–C

B 8bα する (3sg.m) + 主 + ～ともに (ʿim) ・ 2pl.m. + 慈しみ
C 8bβ כאשר + する (2pl.f) + ～ともに (ʿim) + 死者たち
+ ～ともに (ʿimdi) ・ 1sg.

B と C においては，動詞「する」(עשה/ʿāśâ) と，前置詞「～ともに」(עם/ʿim) が，繰り返されており，並行文となっている。しかしながら，C には「～ように」(כאשר/kaᵊăšer) という関係代名詞が導入され，主語が「主」から「あなたがた」に変化している。

B 8bα 主語は「主」， 動詞「する」→対象は「あなたがた」
C 8bβ 主語は「あなたがた」，動詞「する」→対象は「死者たち」と「私」

C は中心箇所であり，前置詞「～ともに」(ʿim) が B と並行的に使われているが，さらに続けて同義語の前置詞「～ともに」(ʿimdi) が付

---

[9] 8bα と 9aα の代名詞 (עמכם，לכם)，8bβ の動詞 (עשיתם) ともに 2 人称複数男性形となっている。代名詞語尾の女性形が男性形に変わることはしばしばあり，後期の文書，特に歴代誌で多く散見される。P. Joüon, *Grammaire de l'hébreu biblique* (Rome 1923) §149b, 150a 参照。

[10] 「与える」(נתן/nātan) は未完了形であるが，意味は対応する動詞「する」(עשה/ʿāśâ) と同じく願望形 (jussif) である。

[11] 但し,「見つける」(מצא) の命令形の語尾は省略形である。*GKC*, 46f 参照。

[12] P. Joüon, *Grammaire de l'hébreu biblique*, §177 h *Ruth*, 36. 参照。

[13] この「慈しみ」は 2：20 では「主」が主語として用いられているのに対し，3：10 ではボアズの言葉の中に出てくる。

け加えられている[14]。それはあなたがた（嫁二人）が（1）死者たち（息子二人）に対して（ʿim），（2）（生者である）私に対して（ʿimdi）してくれたということを強調するためである。

2. ナオミと嫁たち（第１回）

(1) 1：9b の本文

9bα（　2 語）　　ותשק להן
9bβ（2+1 語）　ותשאנה קולן ותבכינה

(2) 1：9b の翻訳

9bα　彼女は彼女ら（オルパとルツ）に口づけした。
9bβ　彼女らは声をあげて泣いた。

(3) 1：9b の構造

A　9bα　口づけする（3sg.f.）＋～に（lᵉ）・pron.3pl.f.
B　9bβ　上げる　　（3pl.f.）＋声　　・pron.3pl.f.
B’　9bβ　泣く　　（3pl.f.）

この箇所ではナオミと嫁たちの行為の二部構成となっている。9bα がナオミ，9bβが嫁たちである。まずナオミは語り終えて二人の嫁たちに別れの口づけをする[15]。それに対し，嫁たちは声をあげて泣くという反応を示す[16]。ナオミの行為に対して二人の嫁たちの行為が記されるが，

---

[14]　「慈しみを施す」（עשה חסד）には前置詞として通常（代上 19：2 を除く）עמדי が使われる。P. Joüon, *Ruth*, 36.

[15]　ここでの「口づけする」（נשק）は別れの意味を持っている。創 31：28 ほか。

[16]　「声をあげて泣く」（נשא קול + בכה）の言い回しは，創 21：16，27：38，29：11，サム上 11：4，　24：17，サム下 3：32，13：36，ヨブ 2：12 に見られる。涙を流すというよりも大声で泣くという意味である。P. Joüon, *Ruth*, 37 頁参照。F. Bush は二詞一意（hendiadys）と言う。前掲書 76–77 頁。「声と泣く」はヨブ 30：31，エズ 3：12。女性が声をあげて泣くのはルツ記以外では創 21：16 のハガルのみで，他の箇所はすべて男性が主語である。

次節（10 節）で彼女らの答えの言葉が述べられることになる。嫁たちが声をあげて泣くことは 14 節前半においても繰り返される[17]。それはナオミの 2 回目の発言（1：11-13）の後においてである。そこではナオミの行為はなく，直接に嫁たちの行為が述べられており，別れの口づけをするのはオルパだけである。

(4) ナオミ（8-9bα）

上述の（3）ではナオミと嫁たちの行為という観点から考察したが，ここではナオミ自身に焦点をあてて，彼女の言葉と行為という別の角度からの分析を試みる。

A	8aα	導入の言葉→「～に」(l^e)	ותאמר נעמי לשתי כלתיה
B ～ B'	8aβ-9a	ナオミの言葉	
A'	9bα	別離の行為→「～に」(l^e)	ותשק להן

ナオミの言葉を別にしてその前後を見ればそこには対応関係がある。

A	8aα	言う	(3sg.f) + ナオミ + ～に (l^e)・二人 + 嫁たち
A'	9bα	口づけする (3sg.f) +	～に (l^e)・3 人称女性複数

8-9bαはナオミの「言う」という言葉ではじまり，「口づけする」という行為でもっておわる。別れの口づけをする行為に関しては主語のナオミが省略されているが，対する相手のどちらにも前置詞「～に」(l^e) が適用されている。導入の言葉には相手が「二人の嫁」と具体的に言われているが，別れの行為では代名詞が用いられているという違いがある。それゆえ導入の言葉は四語であり，終了の行為はその半分の二語である。

(5) ナオミと嫁たち（8-9bαと 9bβ -10）

ナオミの言葉と行為，嫁たちの行為と言葉の叙述は並行的でありながらも，両者をあわせてみればキアスムスの形式によって連繋されている。

(a) 8-9a ナオミの言葉 ╳ (b) 9bα ナオミの行為
(b') 9bβ 嫁たちの行為 ╳ (a') 10 嫁たちの言葉

---

[17] 但し，14 節前半の「（声を）あげる」（נשא）はアレフ（א）が欠ける省略形である。*GKC*, 76b 参照。ותשאנה（9 節）→ותשנה（14 節）

3. 嫁たちの会話

(1) 1：10 の本文

10a（2 語）　　ותאמרנה־לה

10b（4 語）　כי־אתך נשוב לעמך

(2) 1：10 の翻訳

10a　彼女たちは彼女（ナオミ）に言った。

10b「私たちはあなたとともに，あなたの民のところに帰ります」

(3) 1：10 の構造

6 語からなる短いこの節は，嫁たちの会話の導入句と彼女らの言葉の二分節からなり，区分は 8 節のナオミの場合と同様である。

10a　言う(3pl.f.)＋～に(l^{e})・3sg.f.

10b　k̲î ＋～ともに('it)・2sg.f. ＋帰る(1pl)
　　＋～に(l^{e})・民・2sg.f.

① 10 節前半：会話の導入句

ここでは 8 節のナオミのように語る主語は記されていない。ただ，前置詞はどちらも同じ「～に」(l^{e}) である。

8a　(4 語) ナオミ：ナオミは二人の嫁たちに言った。

ותאמר נעמי לשתי כלתיה
ותאמרנה־ לה

10a (2 語) 嫁たち：彼女たちは彼女に言った。

② 10 節後半：嫁二人の言葉

彼女らの言葉はナオミに比較すれば非常に短いものである。

8aβ-9a　ナオミの言葉＝ 22 語

10b　　嫁たちの言葉＝　4 語

ナオミの「帰りなさい」（命令形）に対して嫁たちは「帰ります」（未

完了形）と答える[18]。ただ，その帰る先は異なる。ナオミはそれぞれ母の家（個別）に帰りなさいというのに対し，嫁たちは私たちはあなたの民（集団）のところに帰りますと言う。

(4) 嫁たちとナオミ（10 節と 11 節）

10 節の嫁たちの言葉と次節のナオミの言葉のはじめは，キアスムスの形式で連繋している。

嫁たち (a) 1:10 あなたとともに(אתך) ╳ (b) 1:10 帰る(שוב)
ナオミ (b') 1:11 帰る(שוב) ╳ (a') 1:11 私とともに(עמי)

4. ナオミの会話（第 2 回）

(1) 1：11-13 の本文

	11aα	(2 語)	ותאמר נעמי
A-1	11aα	(2 語)	שׁבנה בנתי
	11aβ	(3 語)	למה תלכנה עמי
	11bα	(4 語)	העוד־לי בנים במעי
	11bβ	(3 語)	והיו לכם לאנשׁים
A-2	12aα	(3 語)	שׁבנה בנתי לכן
	12aβ	(4 語)	כי זקנתי מהיות לאישׁ
	12bα	(5 語)	כי אמרתי ישׁ־לי תקוה
	12bβ	(4 語)	גם הייתי הלילה לאישׁ
	12bγ	(3 語)	וגם ילדתי בנים
	13aα	(5 語)	הלהן תשׁברנה עד אשׁר יגדלו
	13aβ	(5 語)	הלהן תעגנה לבלתי היות לאישׁ
A-3	13bα	(2 語)	אל בנתי
	13bα	(5 語)	כי־מר־לי מאד מכם
	13bβ	(5 語)	כי־יצאה בי יד־יהוה

[18] 小辞 kî はこの姑に対する反意的な答えを導入する。P. Joüon, *Ruth*, 37-38 頁参照。

(2) 1：11-13 の翻訳

11aα　ナオミは言った。
11aα　帰りなさい，私の娘たちよ。
11aβ　　なぜ，私と一緒に行こうとするのですか。
11bα　　私のおなかにまだ男の子たちがいるとでも
　　［思っているのですか］。
11bβ　　あなたがたの夫になるような
　　［可能性のあるところの男の子たちが］。
12aα　帰りなさい，私の娘たちよ，行きなさい。
12aβ　　私は男の人と結ばれるには年を取りすぎているのですから。
12bα　　まだ私には望みがあると考えて，
12bβ　　今夜に［でも］私が男の人と結ばれるとして，
12bγ　　そして男の子たちを産んだとしても，
13aα　　彼らが大きくなるまで待つというのですか。
13aβ　　［それまで］
　　あなたがたは男の人と結ばれることなしに過ごすのですか。
13bα　いけません，私の娘たちよ。
13bα　　私にとってあなたがたのことは大変に心苦しいのです。
13bβ　　［すべて］
　　神の手が私に出されていることなのですから。

(3) 1：11-13 の構造

A-1　11aα　帰りなさい，わたしの娘たちよ。
　a　11aβ　lāmmâ　［疑問詞］＋行く　(2pl.f)＋私とともに
　a'　11bα　ha　［疑問詞］　＋私に(lî)　＋ b̲ānîm
　　11bβ　＋ hāyâ lə'îš
A-2　12aα　帰りなさい，わたしの娘たちよ，行きなさい。
　a　12aβ　kî　［小辞］　＋老いる(1sg.)　＋ hāyâ lə'îš
　a'　12bα　kî　［小辞］　＋言う　(1sg.)＋私に(lî)

b	12bα	gam	［副詞］	＋ある	（1sg.）	＋ hāyâ ləʾîš
b’	12bβ	gam	［副詞］	＋産む	（1sg.）	＋ b̲ānîm
c	13aα	hălāhēn	［疑問詞］	＋待つ	（2pl.f）	
c’	13aβ	hălāhēn	［疑問詞］	＋過ごす（2pl.f）	＋否定詞	＋ hāyâ ləʾîš
A-3	13bα	いけません，わたしの娘たちよ。				
a	13bα	kî	［小辞］		＋私に（lî）	
a’	13bβ	kî	［小辞］			

①三部構成：わたしの娘たちよ

A-1（11）	帰りなさい，わたしの娘たちよ。	שׁבנה בנתי
A-2（12-13a）	帰りなさい，わたしの娘たちよ，行きなさい。	שׁבנה בנתי לכן
A-3（13b）	いけません，わたしの娘たちよ。	אל בנתי

（ｉ）全体の構成

ナオミが二人の嫁に語りかける言葉の全体は，その中で三回繰り返される「私の娘たちよ」によって明白に区分される。ただこの呼びかけの言葉はそれぞれ微妙にずれている。A-1 と A-2 は同じ「帰りなさい，わたしの娘たちよ」という呼びかけで開始されるが，A-2 にはさらに「行きなさい」という命令形が付け加えられている。動詞「帰る」と「行く」の命令形はナオミの第 1 回目の会話の冒頭にもあり，第二回目の会話の中心部分の最初で順序は入れ替わりながらも繰り返されており，両者をあわせてみればキアスムスの形式となっている[19]。

8 節　（a）行きなさい（הלך）╳（b）帰りなさい（שׁוב）
12 節（a’）帰りなさい（שׁוב）╳（b’）行きなさい（הלך）

最後の A-3 には「帰りなさい」という命令形はなく，その代わりに「いけません」（אל/’al）という強い否定辞がはじめに措定されていて語調

[19] 11 節にも 12 節同様に「帰りなさい，私の娘たちよ」のあとに「行く」という動詞があり，8 節と並行的ではあるが，これは命令形ではなく，疑問詞のあとの未完了形である。

の強さが示されている[20]。この否定辞は16節のルツのナオミに対する返答の冒頭にもあり，ルツもまた強く反発するのである。

13節　ナオミ：会話の最後「いけません，私の娘たちよ」 אל בנתי
16節　ルツ　：会話の最初「私に強いないでください」 אל־תפגעי־בי

（ii）全体のインクルジオ：私に（לי/lî）

A-1　私に＝まだ私に，私のおなかに男の子たちがいるとでも［？］
A-2　私に＝［まだ］私には望みがあると考えて
A-3　私に＝私にとってあなたがたのことは大変に心苦しいのです

ナオミの言葉の三部分それぞれに「私に」という語があって，ナオミが強調されていることがわかる。A-1とA-2は私に「子供」すなわち「望み」があるかどうかということで連繋し，最後のA-3は私には，夫を亡くしたあなたがた二人のことが「つらい，心苦しい」（מר/mar）のだということを言っている[21]。この三箇所の「私に」は順次，発展的に設定されている。

(1) 最初に疑問：あなたがたはどう思うのか。
私のおなかにまだ男の子たちがいるとでも［思っているのですか］
(2) 第二に仮定：私が考えるとして。
たとえ，［まだ］私には望みがあると考えて～
(3) 最後に結論：心情を吐露する。
［それは無理です。だから］私にとってあなたがたのことは大変に心苦しいのです

---

[20] 否定辞 אל がここでは単独で使われている。同様な例は，創19：18，士19：23，サム下13：16，王下3：13，4：16．などにもある。E. F. Campbell, 前掲書70頁参照。

[21] この単語は20節で再び繰り返され，ナオミのつらい状況が述べられる。そこでも「私に」が繰り返し強調されている。ルツ1：13では מר־לי（私につらい）と言われているが，哀歌1：4では מר־לה（彼女につらい）と述べられている。

②三部構成の枠組（A-1 と A-3）

A-1（2 語 +10 語）［命令］帰りなさい，わたしの娘たちよ＋疑問詞 （2 回）
A-3（2 語 +10 語）［否定］いけません，わたしの娘たちよ＋小辞 kî （2 回）

A-1 の「わたしの娘たちよ」の前には「帰りなさい」という命令形があり，A-3 の「わたしの娘たちよ」の前には「いけません」という否定辞がある。命令形ではじまるナオミの会話は強い否定辞でもって締めくくられる。

また，A-1 の a と a' は，単語は異なるがどちらも疑問詞（למה/lāmmâ と ה/ha）ではじまるのに対し[22], A-3 の a と a' は，どちらも同じ小辞 כי（kî）ではじまる[23]。二回繰り返される疑問ではじまるナオミの言葉は，二回繰り返される否定の説明（kî）で閉じられる[24]。A-1 と A-3 には人称代名詞の「わたくし」と「あなたがた」があり，A-1 の動詞「行く」は A-3 の動詞「出る」と対応すると考えられ，キアスムスを形成していると見てよいであろう。

A-1　行く（הלך）　　私に（לי）～，あなたがたに（לכם）
A-3　私に（לי）～，あなたがたから（מכם）　　出る（יצא）

③三部構成の中心（A-2）

（ｉ）全体の区分

枠組を構成している A-1（11 節）と A-3（13 節後半）はそれぞれ並行する二分節が総数 12 語で，真中の A-2（12 ～ 13 節前半）には並行する二分節が三区分され総数 29 語から成る。また，A-2 の第 1 区分と第 3 区分の二分節がそれぞれ 10 語ずつで真中の第 2 区分は 7 語である。1：1-18 でのナオミの会話を整理すれば以下のとおりになる。

---

[22] 単語は異なるが，A-2 の c，c' も疑問詞 הלהן ではじまる並行文であるが，両者の関係は明白ではない。

[23] A-2 の a，a' も同じ小辞 כי（kî）ではじまる並行文であるが，A-3 との関係は明白ではない。

[24] この箇所の כי（kî）に関しては，F. Bush, 前掲書, 80-81 頁参照。

- 第 1 回目の会話（8-9 節）
- 第 2 回目の会話（11-13 節）
  - A-1 第 1 部分（11）
  - A-2 第 2 部分（12-13a）
    - 第 1 区分
      - כי
      - כי
    - 第 2 区分
      - גם
      - גם
    - 第 3 区分
      - הלהן
      - הלהן
  - A-3 第 3 部分（13b）
- 第 3 回目の会話（15 節）

（ii）全体のインクルジオ：男性と結ばれる（היה לאיש）[25]

A-1　11bβ（嫁たち）3 人称複数　והיו לכם לאנשים

A-2　a　12aβ（ナオミ）不定詞　זקנתי מהיות לאיש
　　b'　12bβ（ナオミ）1 人称　הייתי הלילה לאיש
　　c'　13aβ（嫁たち）不定詞　לבלתי היות לאיש

「男性と結ばれる」（היה לאיש/hayâ lə'îš）という慣用句が A-1 で 1 回，A-2 で 3 回使われている。A-1 では「あなたがたの夫となる［ような男の子たち］」ということで，二人の嫁たちの夫となるべき人について述べられており[26]，それは A-2-c' でもそうである。A-2 では 2 回ナオミにとって夫となる人について述べられていて，A-2 では三区分のそれぞれにこの用語が組み込まれている。これは明らかに意図的なもので，「男性と結ばれる/結婚する」ということがナオミの会話の中で重要な意味を持っているということである。この慣用句をナオミの第 2 回目の会話全体の中で見れば，嫁たち-ナオミ-ナオミ-嫁たちとキアスムスの形式で

[25] היה לאיש は「ある男に帰属する」が原義で「結婚する」を意味する。レビ 21：3，22：12，民 30：7，申 24：2，エレ 3：1，エゼ 44：25 等参照。"Verheiratet sein", J.Kühlwein, "איש *îš* Mann" *THAT* I, 132. "als Frau angehören" *HALAT* Band 1, 234. "to have sexual intercourse"（ホセ 3：3 参照）J. M. Sasson, *Ruth*（Sheffield 1979，²1989）, 24-25.

[26] すでに 9 節で嫁たちそれぞれにとっての「夫の家」について言及されている。

書かれていることがわかる。

また，第 2 回目の会話の第 2 部分（A-2）の中で見れば，不定詞-1 人称-不定詞と集中化構造の形式になっていて，不定詞に囲い込まれている 1 人称単数のナオミが強調されていることがわかる。ここでは名詞「夜」が「男性と結ばれる」（היה לאיש/hayâ lə'îš）の二語を分けてその真中にあるが，この単語は第 2 回目の会話の全語数 53 語の真中にあたる[27]。

（iii）第 2 部分の構造

第 2 部分（A-2）には「帰りなさい，私の娘たちよ，行きなさい」という呼びかけのあと，同じ不変化詞の小辞ではじまる並行文が三回記されており[28]，この二項並列文によって中心部分は三区分されている。

12aα　「帰りなさい，私の娘たちよ，行きなさい」

┌ 12aβ（a）כי（kî）　＋ 1 人称単数（זקן）　היה לאיש
└ 12bα（a'）כי（kî）　＋ 1 人称単数（אמר）

┌ 12bβ（b）גם（gam）　＋ 1 人称単数（היה）　היה לאיש
└ 12bγ（b'）גם（gam）　＋ 1 人称単数（ילד）

┌ 13aα（c）הלהן（hălāhēn）＋ 2 人称複数（שבר）
└ 13aβ（c'）הלהן（hălāhēn）＋ 2 人称複数（ענן）　היה לאיש

§1　12aαの「帰りなさい，私の娘たちよ」（第二回目）

「帰りなさい，私の娘たちよ」に続いて，「行きなさい」という動詞（הלך）「行く」の命令形がある。この動詞は先行する A-1 の「なぜ私と一緒に行く（הלך）のですか」に対立する意味を持っている。A-1 では疑問文のなかでの未完了形あったが，A-2 では強い命令形「行きなさい」へと変わっている。それゆえ，これに後続する文章はその意味合いを持っているということである。

---

[27]　前の単元の 1-7 節で איש（男/夫）は 1，2，3，5 節に出て来るが，すべてエリメレクについて言われている。

[28]　2 × 3 の構成は，夫妻，息子二人，嫁二人を組み合わせた家族構成と呼応する。

§2　第1区分（a–a'）（כי/kî）

§2–1　（כי/kî）12aβ（a）

最初のכי は「行きなさい」という命令形に直接に後続しているので，理由を説明するものであると考えられる[29]。A–2の「行きなさい。なぜなら私は男性と結ばれるには年を取っているのですから」という言葉は，先行するA–1の「あなたがたにとって夫となる（ような子供が私のおなかにまだいるとでも［思っているのですか］？」（疑問形）を受けて自問自答のように理由を説明する文言である。ただ同じ語句を用いながらも，ここでの「男性と結ばれる」の主語はナオミであり，前節の「男性と結ばれる」の主語は嫁たちである。

§2–2　（כי/kî）12bα（a'）

続く二番目のכי は条件節を導入するものであると考えられ，「私が言う/思う」（אמר）はナオミが心の中で自問することをあらわしている。マソラ本文では分離記号のアトナー（∧）がלאיש の下にあって，ここが12節の前半であるとしている。これは並列している二つのכי の意味が相違するということを示しているためであると考えられる。

「［まだ］私には望みがあると考えて」という言葉は，先行するA–1の「私のおなかにまだ男の子たちがいるとでも［思っているのですか］」に対応すると考えられる。それは「私に」（לי）という表現がどちらにも出てきて，A–1の「男の子たち」はA–2の「望み」と同じ意味であると推測され，「私に男の子たちがいる」は「私に望みがある」と理解されるからである[30]。

11節「私に」（לי）：男の子たちが私にいると，，，　…לי בנים…
12節「私に」（לי）：望みが私にあると，，，　…לי תקוה…

---

[29] “car je suis trop vieille pour appartenir à un homme.” *TOB* (Paris 1975, 1978) 1586.

[30] 9節aβの「安らぎ」が9節aγの「夫の家」をさすのと同様な用法であると考えられる。

§2-3（כי/kî）

このように 12 節（A-2-a，a'）は，11 節後半（A-1-a'）のそれぞれの分節と対応しているが，それを合わせて見ると全体がキアスムスの形式で構成されているということがわかる。

A-1　11 節後半　（a）男性と結ばれる（היה לאיש）
　　（b）私に（לי）男の子たちがいると，，，
A-2　12 節前半　（b'）私に（לי）望みがあると，，，
　　（a'）男性と結ばれる（היה לאיש）

§3　第 2 区分（b-b'）（גם/gam）

12bβ　gam，今夜に［でも］私が男性と結ばれるとして
　　גם הייתי הלילה לאי
　　וגם ילדתי בנים
12bγ　gam，そうして男の子たちを産んだとしても

先行する a，a' が冒頭に kî を 2 回続けていたのに対し，後続する b，b' は冒頭に gam を 2 回続ける。גם（gam）は一般的には「～もまた」を意味する副詞であるが，ここでは 2 回続けて用いられており，第二の גם（gam）には接続詞 waw がついている[31]。

§3-1　גם（gam）

גם（gam）ではじまる並行文には，「男性と結ばれる」から「男子を産む」へという論理的な発展が見て取れる。この箇所はすでに見たように，文学的構造から見てナオミの第 2 回目の会話の中心部分である。

§3-2　12aα と 12bβ

12bβ の「男性と結ばれる」は 12aα の「男性と結ばれる」と対応しており，ナオミの結婚が問題となっている。12aα で，ナオミは自分は

---

[31]　ルツ記のこの“…וגם…גם”に近い用法は，詩 119：23-24（但し，ここでは…גם…גם である）と E. F. Campbell は言う。前掲書 67 頁参照。“…וגם…גם”の用例は，創 24：44，出 10：25-26，サム上 2：26，12：14，26：25 などにある。

結婚するには年を取っているからと断定的に説明するが，12bβ は，「まだ私には望みがあると考えて」（12bα）を引き継いで，「今夜にでも私が男性と結ばれるとして」，「私が男の子を産んだとして」という条件的，譲歩的な意味合いを持っていると考えられる[32]。

§3-3　11 節後半（A-1-a-a'）と 12 節後半（A-2-b-b'）の連鎖

12 節後半の「男の子たちを産んだとして」と，11 節後半の「私のおなかにまだ男の子たちがいるとでも［思っているのですか］？」には，「男の子たち」（בנים）がインクルジオとしてあり，11 節後半と 12 節後半には「男性と結ばれる」という用語もあり，両者をあわせてみるとキアスムスの形式となっていることがわかる。ただすでに述べたように，「男性と結ばれる」が，11 節では嫁たちに関して言われているのに対し，12 節ではナオミに関して述べられているという違いはある。

11a　嫁たち＝(a) 男の子たち　　(b) 男性と結ばれる
12bβ　ナオミ＝(b') 男性と結ばれる　　(a') 男の子たち

§4　第 1 区分と第 2 区分の継続（一人称単数）

以上見てきた第 1 区分（כי/kî：2 回）と第 2 区分（גם/gam：2 回）では，動詞はすべて 1 人称単数形が四回継続しており，ナオミ自身が強調されているということがわかる。また，「男性と結ばれる」と「望み」，「男の子」がそれぞれにあり，第 1 区分と第 2 区分が並行的であることが確認される。

第 1 区分：(a) kî　＋1sg.(זקן)＋היה לאיש　(a') kî　＋1sg.(אמר) 希望
第 2 区分：(b) gam＋1sg.(היה)＋היה לאיש　(b') gam＋1sg.(ילד)　男子

---

[32] E. F. Campbell は "If I were to say... If I were to have... And if I were to bear." と訳し，"These are the three parts to the protasis (the "if..." clauses) of a highly complex conditional sentence." と説明する。前掲書 67 頁参照。但し，*TOB* は גם（gam）を会話の中での強調と解し，"Et même si je disais: ‹J'ai de l'espoir; oui, j'appartiendrai cette nuit à un homme; oui, j'enfanterai des fils›"（p.1586）と訳す。*GKC* §153 参照。

§5　第 3 区分（הלהן/ḥălāhēn）

§5-1　12 節との連鎖

第三区分は הלהן（ḥălāhēn）ではじまる並行文である[33]。ただ動詞は今までの 1 人称とは異なり 2 人称女性複数形である。しかしながら，13a は先行する 12bγと意味内容上つながっている。それは「たとえ私が男の子たちを産んだとして」（12 節），「あなたがたは彼らが大きくなるまで待つというのですか」（13 節）という継続である[34]。そしてそのあとに続けて「［それまで］あなたがたは男性と結ばれることなしに過ごすのですか」と問われる。

12bγ　ナオミ：男の子たちを産む
13aα　嫁たち：男の子たちの成長を待つ（結婚適齢期まで）

§5-2　A-2 の a-a' と c-c' の関係：枠組

小辞 כי ではじまる 12a' の条件文は，疑問詞 הלהן ではじまる 13a において帰結文をむかえる。12 節と 13 節と条件文と帰結文が分かれているのは，あまりに節が長くなるのを避けるためであるとP. Joüon は言う[35]。このように，a' と c は連繋するが，はじめとおわりの a と c' には「男性と結ばれる」の動詞 היה（hāyā）の不定詞があり，ある意味で第 2 部分

---

[33] הלהן については “age-old contention”（J. M. Sasson），“A much-discussed but unresolved problem”（E. F. Campbell），“enigmatic form”（R. L. Hubbard）などと言われ，議論の余地が多い。*BDB* はルツ 1：13 の להן を “therefore”（p.530）とし，聖書アラム語の用法（ダニ 2：6，9；4：24）との可能性も指摘する（p.1099）。しかし，P. Joüon はアラム語の להן は「それゆえに」ではなく，「それだけ」を意味するとし，להן を להם と読むことを提示する。*Ruth*, 39-40. *HALAT* I（p.495）は להן の項で להן を להם と読むことを付記している。その他，*The Dictionary of Classical Hebrew* (Sheffield 1993) vol. IV, 521 参照。

[34] 動詞「待つ」（שבר/śābar，ピエル形）はほかに 5 回，詩文において多く使われている（イザ 38：18，詩 104：27，119：166，145：15，エス 9：1）。アラム語との関係が指摘され，比較的後期の用法と考えられる。E. F. Campbell, 前掲書 69 頁参照。動詞 עָגַן（ʿāgan，ピエル形）はここのみの hapax legomenon である。

[35] P. Joüon, *Grammaire de l'hébreu biblique*（Rome 1923, 1965），§15e 参照。

（12-13a）の枠組を構成していると考えられる。

12a　ナオミ：「男性と結ばれる」動詞 היה（hāyā）の不定詞

מהיות לאיש
לבלתי היות לאיש

13aβ　嫁たち：「男性と結ばれる」動詞 היה（hāyā）の不定詞

ただ，12aβではナオミが主語であり，13aβ では嫁たちが主語となっているという違いがある。はじめにはナオミが夫と結ばれるにはすでに年を取っていることを述べられており，おわりでは子供たちがこれから大きくなって夫と結ばれるような結婚適齢期になるまで待つのかという時間的な対照がある。過去の時間（老齢）と未来の時間（成長）が対比的である。

§5-3　11 節後半と 13 節前半の疑問詞

11 節（למה, ה）と 13 節（הלהן, הלהן）には，どちらも 2 回繰り返される疑問詞ではじまる並行文がある。しかしながら両者の関係は明白ではない。ただすでに見たように，どちらも嫁たちが主語である「男性と結ばれる」が 11 節と 13 節前半にあり，その中間にナオミが主語である「男性と結ばれる」が二回繰り返され，キアスムスの形式となっている。

11b　嫁たち：「男性と結ばれる」　12a　ナオミ：「男性と結ばれる」
12b　ナオミ：「男性と結ばれる」　13aβ　嫁たち：「男性と結ばれる」

§5-4　創 38 章との比較

13aαで言われている「彼らが大きくなるまで」という表現は創世記 38 章のユダとタマルの物語の中においても出てくる。タマルの夫が亡くなったあと，ユダはタマルに父の家に帰るように「わたしの息子のシェラが大きくなるまで，あなたは父の家で，やもめとして暮らしなさい」と言う（創 38：11）

創 38:11　ויאמר יהודה לתמר כלתו　שבי אלמנה בית־אביך עד־יגדל שלה בני
ルツ 1:8　ותאמר נעמי לשתי כלתיה לכנה שבנה אשה לבית אמה
ルツ 1:13　הלהן תשברנה עד אשר יגדלו

創 38：11 では，ユダがタマルにシェラが大きくなるまであなたは，あなたの父の家に帰っていなさいというのに対し，ルツ 1：8 ではナオ

ミが二人の嫁に対して，それぞれ母の家に帰りなさいと言い，1：12 において，たとえ私が男の子を産んだとしても，彼らが大きくなるまで待つというのですかと述べる。創 38 章で話題は現実的であるが，ルツ 1 章では仮定的である。

さらに創 38：11 では，ユダがそのように言うのは「シェラもまた兄たちのように死んではいけないと思って～」（כי אמר）と述べられており，ルツ 1:12 でもナオミが「私には［まだ］望みがあると思って～」（כי אמר）と記されており，両者には同じような表現が見受けられる。どちらも願望を述べるものであり，レヴィラト婚が問題となっている同じ文学類型的に属するものであるからと考えられる[36]。

創 38：11　כי אמר פן־ימות גם־הוא
ルツ 1：12　כי אמרתי יש־לי תקוה

5. 嫁たちとナオミ（第 2 回）

(1) 1：14 の本文

14aα（2 語）　ותשנה קולן
14aβ（2 語）　ותבכינה עוד
14bα（3 語）　ותשק ערפה לחמותה
14bβ（3 語）　ורות דבקה בה

(2) 1：14 の翻訳

14aα　彼女らは声をあげて，
14aβ　また泣いた。
14bα　オルパは姑に口づけし，
14bβ　ルツは彼女に抱きついた。

---

[36]　創 38:11 ではその後に「タマルは父の家に帰って行った」とあり，「行く」（הלך）と「帰る」（שוב）という動詞がセットになっているが，これはルツ 1:7，8 でも同じである。

(3) 1：14 の構造

A　あげる(3pl.f.)＋声を
A'　泣く　(3pl.f.)＋また
B　(a) 口づけする　(b)オルパ　(c) 姑に　(l^{e})
B'　(b')ルツ　(a')抱きつく　(c')彼女に(b^{e})

14 節は 4 分節で構成されており，前半の 2 分節（A–A'）は 2 語＋ 2 語と後半の 2 分節（B–B'）は 3 語＋ 3 語に分かれる。前半では二人の嫁の悲しみが「声をあげる」と「また泣く」という同義的な動詞（複数形）の並列によって表現されている[37]。ここでは二人の名前は記されていず，女性複数の代名詞が使われていて嫁二人の一体感が表現されている。

他方，後半では二人の嫁それぞれの名前があげられていて，二人のナオミに対する態度が別々（単数形）であることが特徴的で，それがキアスムスの形式によって表現されている[38]。オルパは姑に別れの口づけをし（נשק）[39]，ルツは別れの口づけをせず彼女に抱きついて離れない（דבק）[40]。二人の嫁はこうして別々の道を歩むことになる。

(4) 1：9 との比較

9b　(a)　口づけする(3sg.f.)＋彼女らに(l^{e})
　　(b)　あげる(3pl.f)＋声＋泣く(3pl.f)
14a　(b')　あげる(3pl.f)＋声＋泣く(3pl.f)＋また
　　(a')　口づけする(3sg.f.)＋オルパ＋姑に(l^{e})
　　(c)　ルツ＋抱きつく(3sg.f.)＋彼女に(b^{e})

37　二詞一意であると考えられる。

38　14bβの waw は「しかし」の意味である。P. Joüon, *Ruth*, 41 頁。

39　「姑」(חמות/ḥāmôt) は旧約聖書中，ミカ 7：6 以外，ルツ記にしか見出されない（10 回）。1：14，2：11，18，19，19，23，3：1，6，16，17.

40　ルツ 2：8（女と），21（男と），23（女と）においてもルツが主語として動詞 דבק（dābaq）が使われている。創 2：21 では男と女が一体となるという意味で用いられている。

ナオミが別れの口づけをする 9 節とオルパが別れの口づけをする 14 節の両節をあわせて見ると，全体がキアスムスの形式で構成されているということがわかる。14 節の前半で「また」（ʿôḏ）と言われているのは，9 節で嫁の二人がすでに泣いているからである。9 節では「彼女」と代名詞で言われているが，別れの口づけするのはナオミであり，14 節で別れの口づけするのはオルパである。ここでオルパの名前が明示されているのは，やはり名前が明示されているルツと対比するためである。ルツがナオミとオルパのキアスムス構成からはずれているのは，彼女がオルパとは異なり，ナオミと別れずにくっついてゆくからである。

6. ナオミの会話（第 3 回）

(1) 1：15 の本文

15aα（1+3 語） ותאמר הנה שבה יבמתך
15aβ（2+2 語） אל־עמה ואל־אלהיה
15b （3 語） שובי אחרי יבמתך

(2) 1：15 の翻訳

15aα 彼女は言った。「ごらんなさい，あなたの義理の姉妹は帰って行きましたよ[41]。
15aα 自分の民のところに，自分の神のところに。
15aα あなたも義理の姉妹のあとを追って帰りなさい」

(3) 1：15 の構造　キアスムス

15aα （1 語） 会話の導入句（verba dicendi）
(a) 15aα （3 語） ヒンネー＋帰る＋義理の姉妹
(b) 15aβ （2 語） ～に（ʾel）＋彼女の（3sg.f）・民

---

[41] 「義理の姉妹」（יבמה/yᵉbēmâ）はルツ 1：15（2 回）以外，レビラト婚の関係で申 25：7（2 回），9 に出てくるのみである。「義理の兄弟」（יבם/yābām）は申 25：5，7 で使われており，動詞 יבם（ピエル形）は創 38：8，申 25：5，7 で用いられている。

(b') 15aβ　(2 語)　～に（'el）＋彼女の（3sg.f）・神
(a') 15b　(3 語)　帰る＋のあとに＋義理の姉妹

ナオミはルツに義理の姉妹オルパのように故郷に帰ることを強くすすめる。義理の姉妹が帰ったのは，自分の民のところ，自分の神のところであると力説する[42]。この箇所はキアスムスとなっており，語数も a(3 語) b（2 語）b'（2 語）a'（3 語）と均整が取れている。

(4) 1：15 の動詞「言う」(אמר)

ナオミの会話の第 3 回目の導入句は，第 1 回目（8 節），第 2 回目（11 節）と同じ動詞「言う」(אמר) が使われているが，第 3 回目（15 節）では主語のナオミの名前が欠けている。全体で導入句の語数は順次に減少している。

第 1 回目 1：8　(4 語)　ナオミは二人の嫁に言った。　ותאמר נעמי לשתי כלתיה
第 2 回目 1：11（2 語）　ナオミは言った　ותאמר נעמי
第 3 回目 1：15（1 語）　彼女は言った　ותאמר

ちなみに，1：8-17 のオルパとルツの会話の導入句は，3 人称女性複数形から固有名詞へと変化しており，ナオミの場合と逆である。

1：10（2 語）　彼女たちは言った　ותאמרנה־לה
1：16（2 語）　ルツは言った　ותאמר רות

また，ナオミの会話のはじめの語句は以下のとおりである。

第 1 回目 1：8　行きなさい，帰りなさい。　לכנה שבנה
第 2 回目 1：11　帰りなさい，私の娘たちよ。　שבנה בנתי
第 3 回目 1：15　見なさい，帰りましたよ，義妹は。　הנה שבה יבמתך

ナオミによる三回の会話のそれぞれ最初の語句を見れば，そのすべてに動詞 שוב「帰る」が使われていて，二人の嫁が故郷に「帰る」という

---

[42]　モアブ人の神は「ケモシュ」。士 11：24，王上 11：7，33，王下 23：13，エレ 48：7，13.「ケモシュの民」に言及される民 21：29，エレ 48：46 ではその滅亡について述べられている。ルツ 1：15 ではケモシュと具体的に述べられていないが，「神」と「民」が別々に言われている。

ことがナオミの重要な課題になっているかということがわかる。

7. ルツの会話

(1) 1：16-17 の本文

16aα（2 語） ותאמר רות
16aα（3 語） אל־תפגעי־בי
16aβ（3 語） לעזבך לשוב מאחריך
16bα（5 語） כי אל־אשר תלכי אלך
16bα（3 語） ובאשר תליני אלין
16bβ（2 語） עמך עמי
16bγ（2 語） ואלהיך אלהי
17aα（3+2 語） באשר תמותי אמות ושם אקבר
17bα（6 語） כה יעשה יהוה לי וכה יסיף
17bβ（5 語） כי המות יפריד ביני ובינך

(2) 1：16-17 の翻訳

16aα ルツは言った。
16aα そんなひどいことを私に強いないでください。[43]
16aβ あなたを捨ててあなたを後にして帰るなんてことを。
16bα あなたが行かれるところに私は行きます。
16bα あなたが宿られるところで私は宿ります。
16bβ あなたの民は私の民。
16bγ あなたの神は私の神。
17aα あなたが亡くなられるところで私は亡くなり，そこに私は葬られたいのです。
17bα 主がいくらでも私を罰せられますように。

---

[43] 動詞「（危険，妨害に）遭遇する」（פגע/pāgaʿ）は，ここではルツがナオミに言うのに対し，ルツ 2：22 ではナオミがルツに言うのに対し使われている（両者ともに否定形である）。
1：16 אל־תפגעי־בי לעזבך לשוב מאחריך
2：22 ולא יפגעו־בך בשדה אחר

17bβ　私とあなたの間を引き裂くのが死でなければ。

(3) 1：16-17 の構造

	16aα	会話の導入句
	16aα	否定辞＋出会う(imp.)＋～に(bî)・1sg.
A	16aβ	～に(lᵉ)・inf＋～に(lᵉ)・inf＋～から(mîn)・あなたの後
	16bα	kî ＋ ʾăšer(関係代名詞)＋行く(2sg.)→行く(1sg.)
B	16bα	baʾăšer(関係代名詞)＋宿る(2sg.)→宿る(1sg.)
C	16bβ	名詞文：あなたの民(2sg.)＝わたしの民(1sg.)
C'	16bγ	名詞文：あなたの神(2sg.)＝わたしの神(1sg.)
B'	17aα	baʾăšer(関係代名詞)＋死ぬ(2sg.)＋死ぬ(1sg.)
	17bα	このように(kōh)＋する＋主＋私に
		このように(kōh)＋増す
A'	17bβ	kî ＋死＋～の間(bên)・1sg.＋～の間(bên)・2sg.

(4) 1：16-17 の全体的構造　集中化構造

1：16-17 の文学的構造の真中（C-C'）には「あなたの民は私の民，あなたの神は私の神」という並行する名詞文があり，これがルツの会話の中心であることは明白である。しかしながら，それを取り囲む部分（A-B-B'-A'）には，動詞文が並行しており整合的ではあるが，それが前半では 2 回並行して出て来るのに対し，後半では 1 回のみで均衡が破られている。

さらに，不変化詞の小辞 כי（kî）や関係代名詞の באשר（baʾăšer）も前半と後半にあって対応関係が認められつつも，微妙に不整合である。こうしたことを念頭におきながら以下に 1：16-17 の文学的構造の分析を試みる。

①枠組：A-A'　前置詞（2 回-2 回）

A　16aβ　前置詞「～に」(lᵉ)＝2 回。　不定詞＝「捨てる」と「帰る」

לעזבך לשוב

ביני ובינך

A'　17bβ　前置詞「～と」(bên)＝2 回。代名詞＝「わたし」と「あなた」

ルツの会話の最初と最後に前置詞が 2 回ずつ使われている。最初の A（16aβ）では動詞の不定詞「捨てる」（עזב）と「帰る」（שוב）のそれぞれに前置詞「～に」（l^{e}）が付いており，最後の A’（17bβ）では代名詞の 1 人称「わたし」と 2 人称「あなた」のそれぞれに前置詞「～の間と/に」（bên）が付いている。はじめにはルツがナオミにあなたを捨てて帰るということを私に強いないでくださいと述べるのに対し，おわりには私とあなたの間を分かつのが死でなければと言われている。両者には嫁ルツと姑ナオミの分離という対応関係がある。

②骨組：B–B’ 関係代名詞（1 回–2 回）

ルツの言葉の中で関係代名詞は אשר（ʾăšer）が 1 回，באשר（baʾăšer）[44] が 2 回使われている。ただその用法は少々複雑で，16bα の אשר と באשר は並行しており，16bα の באשר は 17aα の באשר と対応関係にある。これら三つの関係代名詞に後続する動詞文はすべて 2 人称＋ 1 人称で並行的である。

A　16bα　אשר（関係代名詞）　動詞文＝行く（2sg.）＋行く（1sg.）動的
B　16bα　באשר（関係代名詞）　動詞文＝宿る（2sg.）＋宿る（1sg.）静的
B’　17aα　באשר（関係代名詞）　動詞文＝死ぬ（2sg.）＋死ぬ（1sg.）静的

（ｉ）A–B　אשר と באשר

A　16bα　あなたが行かれるところに私は行き　אל־אשר תלכי אלך
B’　17aα　あなたが死なれるところで私は死ぬ　באשר תמותי אמות

כי（kî）で導入される二分節の関係代名詞は，前者が אשר（ʾăšer），後者が באשר（baʾăšer）である。前者には方向を示す前置詞「～に」（-אל）があり，後者には場所に留まることを示す前置詞「～で」（ב）がある[45]。ただ両者ともに並行する動詞文が後続し，前者は「行く」（הלך）という動作的行為を，後者は「死ぬ」（מות）という静止的行為をあらわ

---

[44] 「そのところで」という意味でほかに，士 5：27，17：8，9，サム上 23：13，王下 8：1，ヨブ 39：30 などでも使われている。

[45] 前者は後続の単語と分離する前置詞，後者は後続の単語と分離しない前置詞である。

し，両者を合わせて人間の生死の全体を意味していると考えられる。

（ii）B–B　באשר と באשר

B　16bα　あなたが宿られるところで（ובאשר）私は宿ります

ובאשר תליני אלין
באשר תמותי אמות

B’　17aα　あなたが死なれるところで（באשר）私は死にます

16bαと 17aαの関係代名詞「～ところで」（באשר）は「あなたの民は私の民，あなたの神は私の神」という名詞文を取り囲む枠組を形成し，それぞれに動詞文が継続している。ただ後者には「そこに私は葬られる」という 2 語が付加されているという違いはある。

前者の動詞は「宿る」（לין）で，後者の動詞は「死ぬ」（מות）である。לין は基本的には「夜を過ごす」という意味であるが[46]，そこから転義として「動かずにじっとしている」，「留まる」ことをあらわす[47]。先行する A（16bα）の動詞「行く」との対比からも，動かずに「留まる」ことを意味すると考えられる。そうしたことから「宿る」と「死ぬ」はどちらも静止的な動詞という対応関係があると見てよいであろう。

（iii）B’–A’　2 人称と 1 人称

B’　17aα　動詞「死ぬ」2 回（2 人称＋1 人称）

A’　17bβ　名詞「死」1 回，前置詞「～の間と/に」2 回（1 人称＋2 人称）

B’ は動詞「死ぬ」，A’ は名詞「死」で，両者ともに「死」を意味し，B’ は動詞「死ぬ」の 2 人称と 1 人称であったのに対し，A’ は名詞「死」に続いて，前置詞「～の間に」（bên）に 1 人称代名詞語尾と 2 人称代名詞語尾が付随している。動詞の変化と代名詞語尾という違いはあるが，2 人称と 1 人称×1 人称と 2 人称というキアスムスの形式を構成している[48]。

46　ルツ記ではほかに 3：13 に出て来る。「今夜はここで過ごしなさい」

47　ヨブ 19：4，イザ 1：21，エレ 4：14，ゼカ 5：4 等参照。“abide, remain” *BDB*, 533. “bleiben, wohnen” *HALAT* Band I, 503.

48　枠組の כי（kî）のあと，A（16bα）は動詞「行く」の 2 人称＋1 人称であり，A’（17bβ）は前置詞「～の間と/に」＋1 人称＋2 人称であるので，これは人称でキアスムスの形式となっている。

③ C–C’　中心

C　16bβ　あなたの民はわたしの民　עמך עמי
C’　16bγ　あなたの神はわたしの神　ואלהיך אלהי

16–17 節は，16 節が 20 語で，17 節が 16 語で書かれている。16 節の最初の 2 語は会話の導入句であるので，これを省いたルツの言葉自体は 34 語である。中心部分（C–C’）には「あなたの民は私の民，あなたの神は私の神」の 4 語があるが，後半の「あなたの神は私の神」という 2 語がちょうど 34 語の真中にあたり，この神に関する言及がルツの言葉の中心であると理解できる。

16 節最後のルツの言葉は，15 節のナオミの短い言葉に直接答えるもので，両者ともに「民」と「神」がキアスムスの真中にある。ただ，ナオミの会話においては動詞文であるのに対し，ルツの会話においては名詞文であるという違いはある。

ナオミの言葉（15 節）

a　（3 語）帰る＋義理の姉妹　הנה שבה יבמתך
b　（2 語）彼女の民に　אל־עמה
b’（2 語）彼女の神に　ואל־אלהיה
a’（3 語）帰る＋あとに＋義理の姉妹　שבה אחרי יבמתך

ルツの言葉　（16 節）

a　（3 語）あなたが宿られるところで私は宿ります　ובאשר תליני אלין
b　（2 語）あなたの民は私の民　עמך עמי
b’（2 語）あなたの神は私の神　ואלהיך אלהי
a’（3 語）あなたが死なれるところで私は死にます　באשר תמותי אמות

ナオミとルツが述べる「民と神」の人称代名詞語尾を整理すると 3 人称→ 2 人称→ 1 人称の順序になっていることがわかる。

民＝ 3 人称（オルパ）→ 2 人称（ナオミ）→ 1 人称（ルツ）
神＝ 3 人称（オルパ）→ 2 人称（ナオミ）→ 1 人称（ルツ）

15 節で姑のナオミはルツに対して，オルパが自分の民のところ，自分の神のところに帰って行ったように，あなたも彼女のように帰って行きなさいと言う。それに対し，16 節で嫁のルツはナオミに対して，いや，あなたの民が私の民であり，あなたの神が私の神ですと答える。これはすなわち，自分の民とその神を否定して，夫はすでに亡くなっているが

姑であるナオミの民とその神こそが自分の民であり，神であると主張するものである。このようにルツは明言するが, 14節での「抱きつく」(דבק) と16節の「捨てる（否定形)」（עזב）という二つの動詞は，姑との一体感を別様に表現しているものと思われる。なぜなら，創2：24で両動詞は男が独立して女と結婚する意味で使われており[49]，ここでは，ルツが結婚したからには自分の民と神から独立してナオミの民と神に帰属をすることを意味しているからであると考えられる。ただルツ記ではオルパが自分の民とその神へと戻って行ったことに対する非難の言葉はない[50]。

④ A–B と B'–A'　前半（生）と後半（死）

すでに見たように，前半が「行く」と「宿る」の動的と静的な動詞でもって人間の生きることの全体を暗示しているとすれば, 後半は「死ぬ」と「死」の動詞と名詞でもって人間の死ぬことの全体が表現されている。中心部分（C–C'）の「あなたの民は私の民，あなたの神はわたしの神」（16b）をはさんで前半が生で後半が死という対立構造となっている。

⑤ 8節と17節：主

17節でルツは「主が幾重にも私を罰せられますように」（直訳：このように主が私にされますように，このように［更に］増し加えられますように」と誓約の言葉を述べる[51]。ここにおいてルツの口からはじめて「主」という言葉が発せられる[52]。ナオミの口からはすでに8節と13節において「主」に言及されており[53]，13節では「主の手が私に出る」とすべての出来事は主によって着手されていると言っている。これはナオ

---

[49] 但し，創2：24で動詞の順序は עזב → דבק である。

[50] ルツ記ではオルパ個人の会話もない。

[51] サム上3：17，14：44，20：13，25：22，サム下3：9，35，19：14，王上2:23, 19:2（pl.）20:10（pl.), 王下6:31. P. Joüon, *Grammaire de l'hebreu biblique* §165a N. *Ruth*, p.42 参照。

[52] すでにナオミの神がルツの神となっているゆえに「主」と言う。P. Joüon, *Ruth*, p.42 参照。

[53] 会話以外では1：6ですでに「主はその民を顧みられ」と「主」が言われている。

ミの第二の会話（11-13 節）の最後の部分にあたる言葉であるが，第一の会話（8-9 節）においては主が 2 回,「する」と「与える」という動詞とともに並行文を構成している。8 節の「する」+「主」は, 17 節の「する」+「主」と, その意味するところは異なりつつもインクルジオになっていて対応関係があると考えられる[54]。

8 節　祝福の願望：主があなたがたに慈愛を施されますように
17 節　呪縛の誓約：主がわたくしにこのようにされますように

おわりに

以上，本稿においてルツ記 1 章の中心部分であるナオミと嫁たちの会話（8-17 節）を考察した。その結果，明らかになったことは，ナオミとルツの会話がきわめて整合的な集中化構造，あるいはキアスムスの様式で形成されているということである。ナオミの三回の会話のすべてに動詞「帰る」（שוב）が繰り返され，彼女は二人の嫁に故郷に帰るようにと強く勧めるのである。それに対して，ルツは「帰る」ことを強要しないでくださいと強く答え，続けて「私はあなたの行かれるところに行きます」（16 節）と言明する。この「行く」という動詞はナオミの最初の会話で「行きなさい，帰りなさい」（8 節）で言われたことにちょうど対立するものである。こうしてナオミとルツの二人はベト・レヘムへと帰って行くことになる。

[54] 神は 15 節と 16 節に出てくる。